

縫いの技術習得に関する研究

○山田智子* 小林理絵** 八木有里子** 伊藤紀子**

(*赤碓高 **鳥取大)

【目的】家事労働の社会化に伴い、私たちが着用する衣服の大半は、自家製作から既製服となり、併せて学校教育においても、児童生徒が学習する技能や技術は簡素化されてきた。しかし、資源や環境を視野に入れた能動的な消費者教育を推進し、生涯心豊かに自立した衣生活を送るためにも、基礎・基本的な生活技術の教育は必要と考える。そこで本研究では、基本的な縫いの技術について、実技テストとアンケート調査を行い、その結果から、それら技術教育のあり方について検討する。

【方法】1996年9～11月、高校生、専門学校生、短大生、大学生計220名を対象に、衣類の保持と補修に関係すると想定される作業であるボタンつけ、カギホックつけ、すその始末、縫い目のほころび直しについて、手縫いによる実技テストを実施し、その評価を行った。同時に、これらの技能の習得の必要性、実生活における活用状況、ならびに学習歴などに関する項目を設定した質問紙調査を行い、その結果を比較検討した。

【結果】実技テストでは、ボタンつけのみ男女とも十分な技術力を有していたが、その他の技術については女子の方が出来映えが良く、男女差が認められた。各技術力と技術習得の必要性、実生活における活用状況は、相関が認められた。実技テスト結果と被験者の所属校種には明確な相関がなく、小、中学校の男女共修教育の効果が認められなかった。技術習得の場所は、男女とも主に学校であり、縫いの技術教育には、学校教育の果たす役割の重要性が明らかとなった。